「学生can-do/英語教員意識調査から見た英語教育の現状と今後の課題」

発表者：　吉田研作（上智大学）
研究分析協力：渡部良典（秋田大学）、根岸雅史（東京外国語大学）、
長沼君主（清泉女子大学）、
㈱ベネッセコーポレーション国際教育事業部

1. 「GTEC for STUDENTS 英語コミュニケーション能力テスト」と Can-do 調査の結果を基に、日韓高校生の英語力の実態について調べた。

GTEC for STUDENTS では、韓国の平均は 414.8（N = 5098）、日本の平均は 407.8（N = 4236）と、韓国が幾分高い。GTEC for STUDENTS は絶対評価、より正確には目標準拠評価に基づいていたテストである。

		N	Mean	S.D.
Total SCORE	Japan	4236	407.8	88.7
	Korea	5098	414.1	120.7

GTEC for STUDENTS のスコアは 6 つのグレードに分けてそれぞれのグレードの英語力の定義がされているが、それによれば、合計得点を見た限りでは両国の受験者ともに、Grade ３のレベルにあることがわかる。すなわち、「**英語圏へのホームステイや海外旅行に行って、英語体験を楽しめる最低限レベル**」と**定義される**。そこで、データをより詳しく見て、それぞれの国の高校生の実態と同時に、今後の課題について考えることとする。

【TOTAL　運用力　グレードの定義】

スコア帯	Grade	グレードの意味
610 以上	6	《CAN-DO》英語圏の４年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル（680 以上）　《技能レベル》３技能のグレード平均６以上
520～609	5	《CAN-DO》英語圏の２年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル（540 以上）　《技能レベル》３技能のグレード平均５以上
440～519	4	《CAN-DO》短期の語学留学で英語圏に行き、授業についていくための最低限レベル《技能レベル》３技能のグレード平均４
380～439	**3**	**《CAN-DO》英語圏へのホームステイや海外旅行に行って、英語体験を楽しめる最低限レベル《技能レベル》３技能のグレード平均３**
300～379	2	《CAN-DO》英語のネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル《技能レベル》３技能のグレード平均２
299 以下	1	《CAN-DO》これからの可能性に期待レベル《技能レベル》３技能のグレード平均１

その前に総合得点について一言申し添える。今単に得点と受験者数だけを見たが、受験者の個人差、すなわち受験者層のばらつきを確かめるために**標準偏差（SD）を見ると、韓国は 120.7、日本は 88.7** であり、韓国の方が値が高い。これは**韓国の方が学生間の英語力にばらつきが大きい**と言うことを示している。すなわち、英語力に関して、韓国の高校生の方が個人差が大きく、日本の方がより均質であることがわかる。

各技能別結果の考察

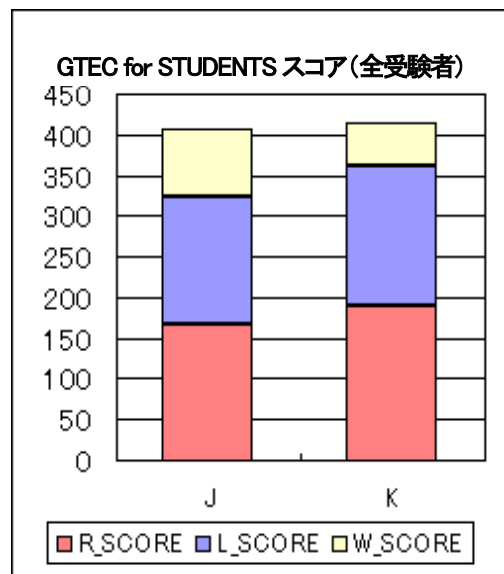
リーディング、リスニング、ライティングの３技能に分けて両国の傾向を見る。

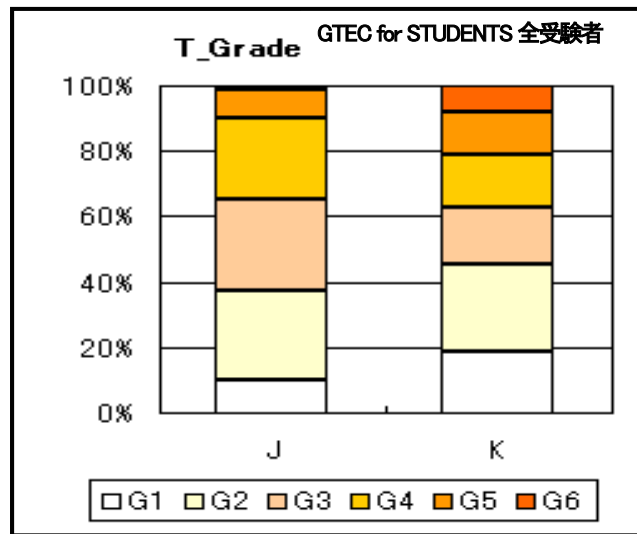
		N	Mean	S.D.
Reading SCORE	Japan	4239	166.4	44.5
	Korea	5124	190.6	50.3
Listening SCORE	Japan	4240	156.7	38.5
	Korea	5100	171.6	47.0

韓国の受験者はリーディングが日本よりも得点が高い。190.6（N =5124, SD = 50.3）というのは、Grade ５にあたり、「困難な情報検索に加え、文章全体の主旨を読み取ることがほぼ問題なくできる。文章をかなり正確に、かつ適切なスピードで読むことができる」レベルである。また、リスニングについても韓国の受験者は、171.6（N = 5100, SD = 47.0）と得点が高い。しかし、**Grade** は３であり、「基礎的な単語・構文はほぼ正確に聞き取ることができるが、イディオムの聞き取り等は不十分である。文全体の聞き取り・理解が、はっきり発音されていれば出来る。相手の発言をほぼ正確に理解できるが、応答の速さに欠ける」と判断される。したがって、レベルアップする余地がかなりあるといえる。

		N	Mean	S.D.
Writing SCORE	Japan	4238	84.8	22.3
	Korea	5133	51.5	38.4

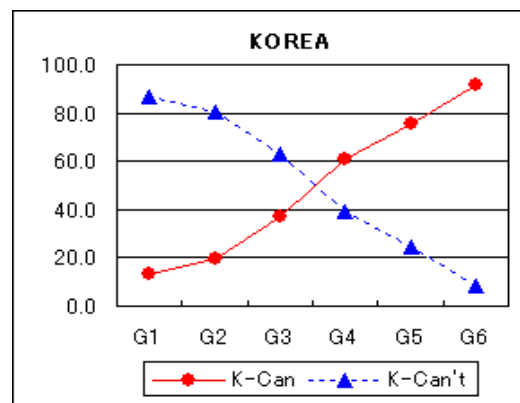
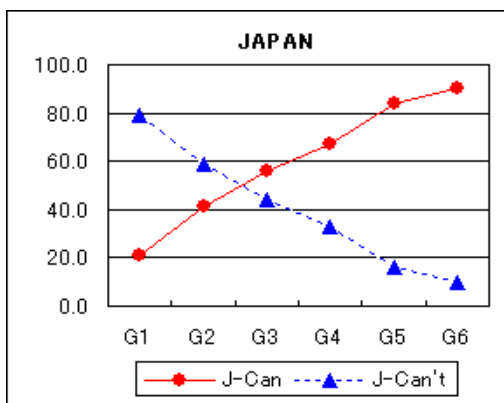
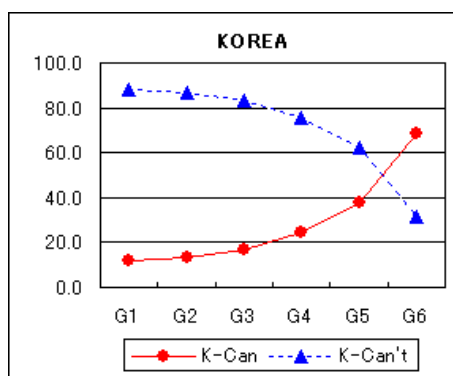
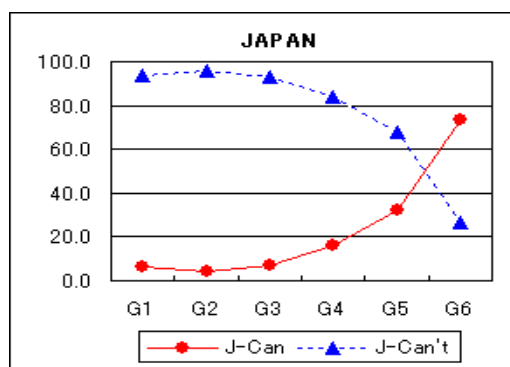
一方、日本は 84.8（N = 4,238; SD = 22.3）とライティングの得点が高い。しかし高得点とはいえ **Grade** ３であり、「使われている単語や文型は簡単ではあるが、多様性が見られる。論理的な文が多い。事例を取り入れながら、ほぼ課題に沿った文章展開をしているので、考えが伝わりやすい。不自然な話の展開やミスによって考えが伝わりにくいところがある」と判断される。

このような両国の特徴は次の図を見るとよくわかる。すなわち、韓国の受験者の場合は、総合得点が、主にリーディングとリスニングの得点で占められているのに対し、日本の総合得点はより大きな割合をライティングの得点が占めている。

さらに、標準偏差を考察すると、韓国はリーディング（J: 44.5 －K:50.3）、リスニング（J:38.5－K:47.0）、

ライティング（J:22.3－K:38.4） いずれの領域においても、学生間のばらつきが日本よりも大きいということがわかる。下記の図をみると分かるように、韓国の学生はさまざまなレベル（Grade）に受験者が分散しているのに対し、日本の受験者はGrade３やGrade２などに集中していることがわかる。これも両国の受験者の特徴と見ることができるだろう。

Can-Do 調査

さて、このような客観的な英語能力と同時に、学生自身が英語を使って自分は何をできると考えているのかを見るために、Can-Do 調査を行った。

Can-Do 調査表は53 項目からなる質問紙であるが、これまでの調査から、学生は教室内で行う活動、教室外で行う活動、国外で行う活動と３つのタイプに分けて捉えていることがわかっているので、ここでもその結果を基にして考察する。

各項目の結果を図表に表すと、どの項目についても両国とも似たような傾向があることがわかる。例えば、「Q５ 授業中の教科書内容についての英問英答」ができるかどうかに対する回答を図示したものを見てみよう。縦軸は人数のパーセンテージ、横軸は上記GTEC for STUDENTS の Grade である。

当然のことながら、G1 から G6 に Grade が上がるにつれ「できる」と答えている受験者の数が増え、逆に「できない」という回答数が減っている。そしてこの傾向は両国とも同じである。しかしながら、さらに考察を進めると、このようなパターンにも質問項目によって違いがあることがわかる。たとえば、次は「Q6 授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話ができる」の結果である。

これも両国で同じような傾向を示しているが、先の質問5に比べると、Grade6への上昇傾向がより顕著であることがわかる。すなわち、授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話ができるかどうかということについては、最も高い Grade6になって初めてできるという自信が持てることを示しているのである。

さて、この情報を一覧表にまとめてみると、学生はどのような活動をできるとみなし、どのような活動をできないとみなしているのかがよくわかる。

教室内活動

	J-Grade	K-Grade	
Q01	G2-G3	G0-G1	英語教科書の本文を声に出して読む
Q02	G3-G4	G2	英語教科書の本文を読んで理解する
Q03	G4-G5	G2-G3	英語教科書の本文を耳で聞いて理解する
Q04	G4-G5	G3	教科書内容について、先生による英語での説明(オーラル・イントロダクション)について
Q05	G2-G3	G3-G4	授業中の教科書内容についての英問英答について
Q06	G5-G6	G5-G6	授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話について
Q07	G2	G2-G3	辞書を引くとき
Q08	G5	G4	ペアワーク(2人で行う英語を使った活動)について
Q09	G5	G4	グループワーク(グループで行う英語を使った活動)について
Q10	G5-G6	G5-G6	英語でのインタビュー
Q11	G4+	G3-G4	英語でのスピーチ
Q12	G5	G4	英語でのプレゼンテーション
Q13	G5-G6	G4	英語でのロール・プレイ
Q14	G5-G6	G5	英語でのディスカッション
Q15	G6	G5	英語でのディベート
Q16	G5-G6	G3-G4	英語でのスキット・劇
Q17	G3+	G3	英語での日記
Q18	G5-G6	G5	教科書本文内容のサマリー(概要)を英語で書く
Q19	G5+	G5	英語での言い換えについて
Q20	G5+	G5	英語での聞き返しについて
Q21	G5-G6	G4	英語を使う場面でのジェスチャーについて
Q22	G5-G6	G5	英語の聞き取り

この表を見ると、たとえば同じ教室内の活動でも「Q03 英語教科書の本文を耳で聞いて理解する」については、日本の場合「G4–G5」ができると答えている受験者が多いのに対し、韓国ではより低いレベルの「G2–G3」の受験者でもできるという回答が多いことがわかる。なお、全体として、Q05 の「授業中の教科書内容について英問英答ができる」ができる、という項目と Q07 の「辞書を引くとき」単語の意味等が自分で調べられる、という項目を除いては、多少韓国の学生の方が低いレベルでも「できる」と答えていることが分かる。

一方、どちらの国の学習者にとっても、たとえば「Q20 英語での聞き返し」などはかなり高いレベルの受験者しかできると答えていないことから、おそらくは教員が考えているほど簡単な言語使用ではないのである、と

いうことがわかる。

教室外活動

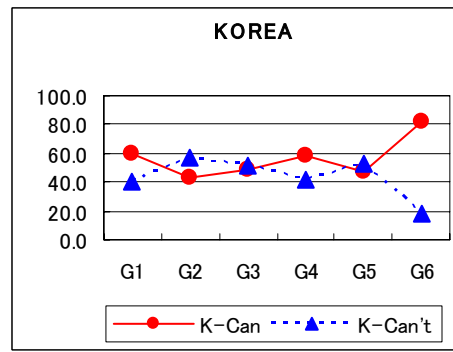
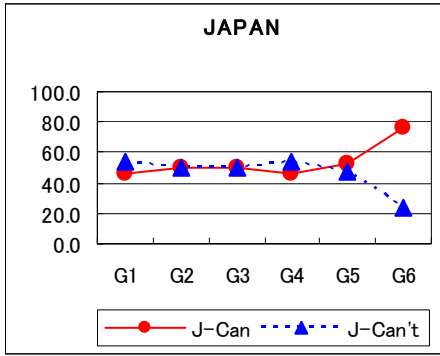
	J-Grade	K-Grade	
Q23	G0-G1	G1	英語での自己紹介
Q24	G4	G2	英語での電話
Q25	G5	G4	英語での説明(例えば、英語で道をたずねられたり、切符の買い方をたずねられたとき)
Q26	G3-G4	G0-G1	自分の好きな洋楽アーティスト(歌手、音楽グループ)の英語の歌
Q27	G5	G4	英語で書かれたインターネットのホームページ
Q28	G4-G5	G3	英語で書かれた「レシピ」(料理の作り方)
Q29	G4	G2	教科書以外で、自分から進んで読む英語の本
Q30	G5	G3-G4	英字新聞
Q31	G3	G2	英語での電子メールや手紙を受け取ったとき
Q32	G5-G6	G4	英語で書かれた説明書(例えば、電気製品などの取扱説明書や薬の飲み方)
Q33	G5	G4	英語の天気予報
Q35	G5-G6	G5+	テレビ・ラジオでの英語音声のニュース
Q36	G6	G5-G6	英語音声の映画・ビデオ・DVD
Q37	G4-G5	G4	英語で書くはがきやカード
Q38	G4	G4	英語で書く日記
Q39	G4	G4	英語で書く電子メールや手紙

国外活動

	J-Grade	K-Grade	
Q43	G1-G5	G2-G3/G5	英語圏での学校の授業
Q44	G5-G6	G1-G2/G4-G5	英語圏での学校の教科書
Q45	G5-G6	G1-G2/G4	英語圏での学校の授業のノート
Q46	G1-G2	G2?	ホテルでの英語のやりとり(例えば、英語で自分の行きたい場所や知りたい情報をたずねるとき)
Q47	G3-G4	G0-G1	英語圏での服などの買い物
Q48	G1	G0-G1	英語圏の人たちへの日本文化の紹介
Q49	G1/G2-G3	G1-G4	英語圏での(ホーム)パーティーでの会話
Q50	G0-G1	G0-G1	英語圏でのファースト・フード店
Q51	G3-G4	G2-G5	英語圏の郵便局や両替所
Q52	G4	G2-G3	街の掲示や案内
Q53	G6	G1/G4-G5	英語圏での公共の乗り物(電車やバス)のアナウンス

さて、上の表からも明らかだが、Can-Do 調査からも韓国の受験者の方が日本の受験者よりも高い値を示していることが分かる。その傾向は、各項目の平均を示した表を見るとさらに明らかである。また、国外における英語活動の場合はちょっと別として、少なくとも国内における授業外英語活動についても、授業内英語活動同様、韓国の学生の方が、**より低いグレードから「できる」と答えている傾向が見られる**。つまり、GTEC for STUDENTS の結果としてのグレードで定義されている英語力以上に、韓国の学生は、英語が「できる」と答えている、といえるだろう。このことから推測できることは、**韓国の受験者は日本の受験者に比べて英語使用能力に自信をもっているということができる。**

ところで、このデータで興味深いのは、国外における英語活動と GTEC for STUDENTS のグレードの関係である。次のグラフを見てみよう。

これは、**Q43 「英語圏での学校の授業」が理解できる**かどうか、という項目の結果を表したものだが、日本、韓国共に、グレード 6 を除いて、GTEC for STUDENTS のグレードとの相関がみられないのである。このことから、少なくとも、グレード６を取っている人は、英語圏の学校での授業についていける可能性が高いが、グレード５以下の場合は、グレード１から５まで、どのグレードにおいても、「できる」と答えている学生と「できない」と答えている学生の割合が変わらないのである。

さて、GTEC for STUDENTS との関係はどうであろうか。先に見たとおり、韓国の受験者は特にリーディングに優れ、日本の受験者は特にライティングの得点が高いことが分かった。この傾向はやはり Can-Do 調査にも見られるのであろうか。Can-Do 調査では特に 4 技能にわけてはいないので直接この疑問に答えることはできない。しかしながら、傾向はわかる。たとえば「英語教科書の本文を読んで理解する」(Q2)、「教科書以外で、自分から進んで読む英語」(Q29)、「英字新聞を読む」(Q30)などリーディングに関係した項目である。そしてこれらについては、それぞれ、2.75(韓国)と 2.24(日本)、1.83(韓国)と 1.47(日本)、1.59(韓国)と 1.41(日本)というように、いずれも全体的な傾向と同様、韓国の受験者が高い値を示している。

ライティングについてはどうであろうか。「教科書本文内容のサマリー(概要)を英語で書く」(Q18)、「英語で日記を書く」(Q38)、「英語で電子メールや手紙を書く」(Q39)などについては、それぞれ、1.93(韓国)と 1.59(日本)、1.56(韓国)と 1.51(日本)、1.58(韓国)と 1.59(日本)という値である。リーディングに比べるといずれも低い値である。しかし、両国の差はリーディングほど大きくはない。また、「英語圏の人たちに自分の文化の紹介する」(Q48)については日本が 2.10、韓国が 1.92 となっている。

次に、ひとつ興味ある傾向があったので、ここで紹介しておきたい。次の表は、Can-Do の内容について、学生に実際にどれだけ経験したことがあるかを聞いた結果である。単位は%である。

	韓国	日本	質問項目
Q26	90.1	81.6	自分の好きな洋楽アーティスト(歌手、音楽グループ)の英語の歌
Q52	89.9	87.0	街の掲示や案内
Q23	89.0	92.7	英語での自己紹介
Q36	87.7	83.6	英語音声の映画・ビデオ・DVD
Q47	87.0	85.4	英語圏での服などの買い物
Q50	85.7	78.2	英語圏でのファースト・フード店
Q53	80.0	64.1	英語圏での公共の乗り物(電車やバス)のアナウンス
Q29	77.9	45.5	教科書以外で、自分から進んで読む英語の本
Q27	77.5	37.6	英語で書かれたインターネットのホームページ
Q32	77.1	40.2	英語で書かれた説明書(例えば、電気製品などの取扱説明書や薬の飲み方)
Q46	**75.2**	**48.6**	**ホテルでの英語のやりとり(例えば、英語で自分の行きたい場所や知りたい情報をたずねるとき)**
Q38	72.7	40.6	英語で書く日記
Q35	72.0	37.8	テレビ・ラジオでの英語音声のニュース
Q24	**65.6**	**23.6**	**英語での電話**
Q25	64.4	34.0	英語での説明(例えば、英語で道をたずねられたり、切符の買い方をたずねられたとき)
Q44	62.8	26.0	英語圏での学校の教科書
Q30	62.3	22.1	英字新聞
Q37	59.6	44.5	英語で書くはがきやカード
Q31	**56.8**	**28.1**	**英語での電子メールや手紙を受け取ったとき**
Q39	**55.5**	**31.3**	**英語で書く電子メールや手紙**
Q33	55.5	20.4	英語の天気予報
Q43	54.7	32.9	英語圏での学校の授業
Q49	53.5	43.7	英語圏での(ホーム)パーティーでの会話
Q48	51.8	57.0	英語圏の人たちへの日本文化の紹介
Q51	45.7	31.7	英語圏の郵便局や両替所
Q45	44.6	24.2	英語圏での学校の授業のノート
Q28	**42.6**	**16.5**	**英語で書かれた「レシピ」(料理の作り方)**

ここで興味を引かれたのは、「ホテルでの英語のやりとり(例えば、英語で自分の行きたい場所や知りたい情報をたずねる)」(**Q46**)(韓国**75.2**、日本**48.6**)、「英語での電話」(韓国**65.6**、日本**23.6**)、「英語での電子メールや手紙を受け取る」(**Q31**)(韓国**56.8**、日本**28.1**)、「英語で書かれたレシピ(料理の作り方)」(**Q28**)(韓国**42.6**、日本**16.5**)というように、これらを経験したことがあると回答した学生が日本に比べて、韓国では随分多いという点である。同じ EFL 環境でありながら、このようなことを経験する機会が韓国には多い、という結果になったのである。

教員アンケート調査

今回ご協力いただいた先生方は表に示したとおりである。

年齢	Japan	Korea
平均年代	34.3	38.3
20 代	16	4
30 代	21	17
40 代	18	17
50 代	14	12
60 代		2
Total	69	52

教員経験	Japan	Korea
平均経験	15.2	16.5
5 年以内	14	11
10 年以内	14	8
15 年以内	11	5
20 年以内	13	10
20 年以上	16	18
無回答	1	
Total	69	52

＊ それぞれの経験年数の上限に人数をかけて計算

＊ 20 年以上は 25 年として計算

過去5年間の英語教員研修受講経験		
	Japan	Korea
%	40.6	80.8
あり	28	42
なし	41	10
無回答		
Total	69	52

始めに、共通しているのは、どっちの国も、回答者の平均は 30 代であり、教員歴も 15 年から 16 年という点である。すなわち各学校で中心として指導にあたっているのはこの年代であるといえるかもしれない。

教員研修については、日本の場合「ある」と答えたのが 28 人（40.6%）韓国が 42 人（80.8%）である。韓国の教員の方が日本の教員より教員研修を経験していることが分かる。私たちが文部科学省の委託研究として行った調査では、教員研修は指導要領の理解を深め、よりよい指導を行うのに大変有益であるということがわかっているが、日韓の教員研修がそれぞれどのような内容なのかについても、今後共同調査が

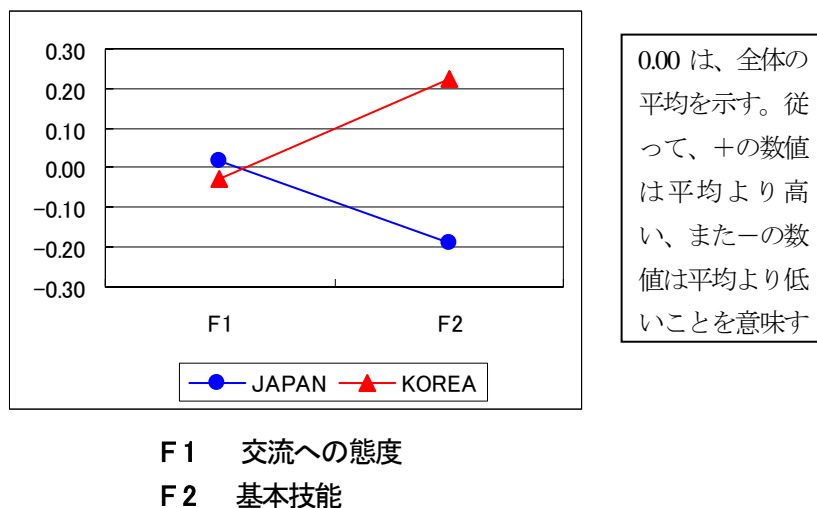
できれば面白いだろう。

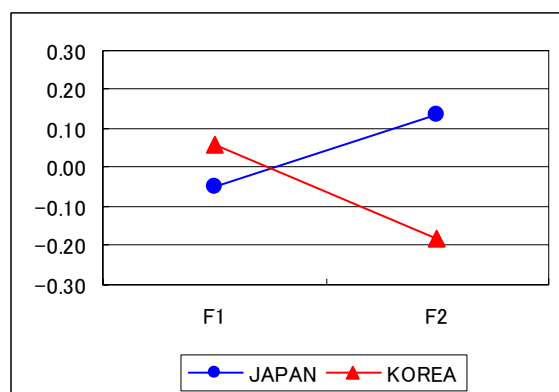
教員向けのアンケートは日本の学習指導要領が実際に教員にどのように受け取られているのか、どの程度実施されているのかを調査するために作成したものである。日本の指導要領なので韓国の実情には必ずしもあっていないかもしれない。しかし、事前に韓国の指導要領を調べたところ、それほど大きく違うところはないということがわかったので、そのまま使うことにした。

さて、このアンケートは大きく分けて教員の英語教育に対する理念的側面、指導内容、教える際に特に配慮していること、この３つに分けられている。理念的側面の項目について５段階で、「５全く賛成である」から「１全く賛成できない」という尺度で回答を求めた。また、指導内容の項目については、４段階で「４かなり頻繁に行っている」から「１全く行っていない」、また、教える際の配慮事項についても４段階で「4十分配慮している」から「１全く配慮していない」の尺度で回答を求めた。

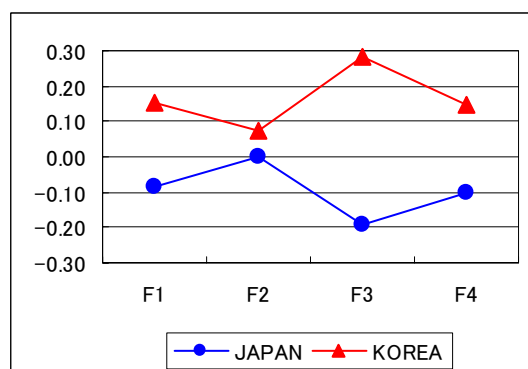
教員の英語教育に対する理念的に関しては、韓国と日本の間に大変大きな特徴が見られる。特に英語学習においてどこまでを最低限の能力として求めるかに関して顕著である。図を見てみよう。これは、因子分析という統計分析の手法を使って、基本的な英語到達目標と分類された項目である。そして、これらをまとめた傾向をしめしたのが次の図である。

0.00 は、全体の平均を示す。従って、＋の数値は平均より高い、また－の数値は平均より低いことを意味す

F１　交流への態度
F２　基本技能

日韓で最も大きく異なるのが、**F2**（第２因子：基本技能）、すなわち「中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない」、「中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない」、「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない」、「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない」などの項目について韓国と日本を比較すると、総じて、これを最低限の目標とするという傾向が韓国の先生方の間に顕著であるということである。ここでは「だれもが」というところが重要であると思う。韓国の教員は総じて「学生だれもが」という意識が高いということがいえるかもしれない。

なお、上記のグラフから分かる通り、F1（第1因子：交流への態度）は、これを見る限り、両国の間の違いはないように思える。そこで、F1を更に、下位因子に分けてみる、次のグラフに見られるように、と第2下位因子の「関心・意欲」に含まれる、「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」、「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」、「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」などの項目で、日本人教員の方が強い意識をもっていることが伺える。

F1　　国際意識
F2　　関心・意欲

次に、指導内容についてみてみよう。次の図は、「主に、聞くことと話すことを指導している時、重点を置くこと」について見たものである。

主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時、重点を置くこと

F1　　コミュニケーション活動
F2　　リスニング活動
F3　　他技能などとの連関
F4　　文法指導

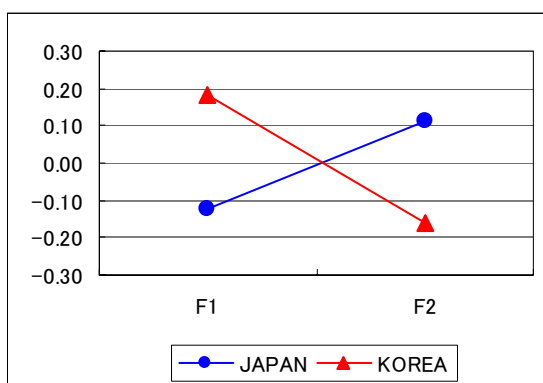
ここでF1（コミュニケーション活動）について言えば、韓国の教員の方が日本の教員よりも多少実践しているようだが、さほど大きな差はない。なお、この因子には、次のような項目が含まれている。例えば、「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、英語で話し合ったり意見の交換をさせたりする」、「幅広い話題について話し合ったり（問題点や原因などを考え、意見交換する）、討論したり（賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する）させる」、「発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現やルールを学習し、活用させる」、「実際の言語使用場面を反映させた、複数の領域にまたがる総合的な活動を設定して練習を行わせる」、「自分が考えていることなどについての考えをまとめ、簡単なスピーチ等の発表をさせる」、「モデルをもとにするなどして、スキット、ロールプレイなどを創作し、演じさせる」、「身近な話題について英語で情報を伝えたり会話をさせる」、「自分や聞き手の置かれた状況を考慮し、伝える目的を考えながら伝えさせる」、「聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、英語で書いたり話したりさせる」などの項目が含まれている。

それに対して、F2（リスニング活動）については、総じて違いは見られない。ちなみに、この因子には次のような項目が含まれている。「まとまりのある英語を聞いて、必要に応じメモを取るなどしながら、その概要や要点をとらえさせる」、「英語を聞いて、その情報や話し手の意向について質問したり、感想を言わせる」、「英語を聞いて、その情報や話し手の意向などの概要や要点を、サマリーを書くなどして、とらえさせる」、「英語を聞いて、その情報や話し手の意向（考え、意見、気持ち、感情など）などを理解させる」などが含まれている。

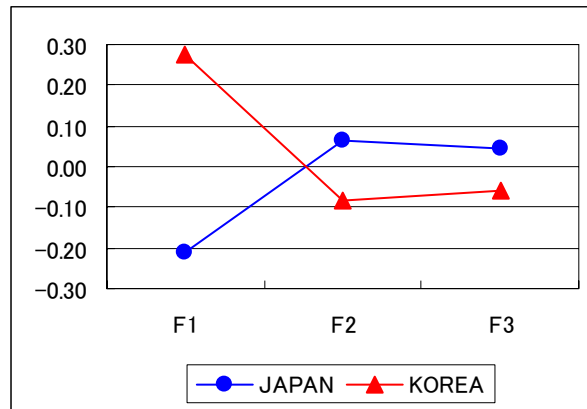
しかし、**F3（他の技能などとの連関）については、韓国の教員の方が日本の教員よりも実施していることが分かる。**例えば、「読んだ内容に関して聞き話す活動をさせる」、「例えばサマリーを書くなど、英語を聞いて話し手の意向を理解したり、概要や要点をとらえる活動をさせる」、「中学校における指導内容との関連を考慮した上で、音声によるコミュニケーション能力を重視した活動を行わせる」、「聞き取った内容に対して自分の思いや考えなどを整理して、日本語で書いたり話したりさせる」というように、**聞くこと、話すことの活動でありながら、他の技能と統合して教えているのである。**

F4(文法指導)については、両国ともさほどの違いは見られない。これには、例えば、「オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを使った練習をさせる」、「オーラル・コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などについて説明し、理解させる」などが含まれている。

次に、主に、「書くこと」を教えている時、重点を置くことである。ここでは、**韓国ではサマリーなどを書かせることに重点を置いて指導しているのに対し、日本では書くプロセスに重点を置きながら指導している傾向がうかがわれる。**サマリー・ライティングとは、例えば、次のような項目をいう。「読んだ内容について、自分の考えなどを整理して書かせる」、「聞いた内容について、自分の考えなどを整理して書かせる」、「読んだ内容について、概要や要点を書かせる」、「聞いた内容について、概要や要点を書かせる」、「聞いたことや話そうとすることと関連づけて書かせる」、「自分が伝えようとする内容を整理して書かせる」、「自分の伝えようとする内容について、整理して、場面や目的に応じて、読み手が理解できるように書かせる」などが含まれている。それに対して、プロセス・ライティングには、「より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」、「より豊かな内容で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」、「文法や語法について正しく書くことに留意して書かせる」などがふくまれている。

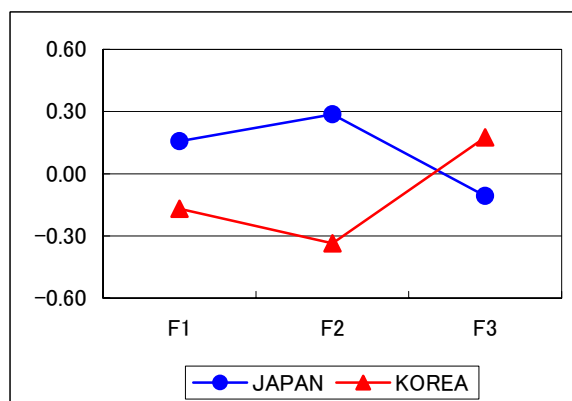
主に、「書くこと」を教えている時、重点を置くこと

F1　サマリーライティング
F2　プロセスライティング

次に、おもに読むことを指導している際は、F1（サマリーリーディング）に見られる「読んだ内容について、書き手の意向（考え、意見、気持ち、感情など）を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる」、「まとまりのある英語を読んで、その内容について、概要や要点を英語でまとめさせる」、「教科書以外の読み物を楽しみのために多読させる」については、韓国の教師の方が日本の教師よりもより重視していることが分かるが、F2（サブスキルトレーニング）とF3（文法訳読）においてはさほど大きな差はない。ちなみに、F2には、次のような項目が含まれている。「文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる」、「未知の語の意味や文法の知識を活用して推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読ませる」、また、F3には次のような項目が含まれている。「文型・文法の解説をする」、「英文和訳をさせる」、「語句の解説をする」。

主に、「読むこと」を教えている時、重点を置くこと

F1　サマリーリーディング
F2　サブスキルトレーニング
F3　文法訳読

「GTEC for STUDENTS 英語コミュニケーション能力テスト」では韓国の受験者はリーディングに高い得点を示し、日本の受験者はライティングに高い得点を示したが、上で見たような指導が結果となって現れているのかもしれない。しかしながら、これはあくまで教員が何をやっていると「言っている」かを尋ねた結果であって、実際にどのような指導を行っているかについては、授業観察などを行い、検証する必要がある。

最後に、教える際に配慮している点である。これをみると、日本の教員の方が韓国の教員より、「国際的視野の育成」をすることに焦点を置いて指導している」(F1)と言えるだろう。この因子には、「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む」、「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う」、「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育む」などが含まれている。

教え方、内容の扱い方（科目を問わず、教える際に考慮していること）

F1　国際的視野の育成
F2　インタラクション
F3　ニーズ

また、更に大きな違いがあるのは、F2（インタラクション）である。これも日本の教員の方が韓国の教員より重視していることが分かる。この因子には、次のような項目が含まれている。「ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れた指導を行う」、「ネイティブスピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる」などである。

最後に、F3(ニーズ)だが、これは全く差がないことが分かる。つまり、「家庭生活や学校生活の中で生徒の興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる」、「場面や目的に応じて、主体的に英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりして自発的にコミュニケーションに取り組むように指導する」、「生徒の実態に応じて、中学校における基礎的な学習事項を用い、多様な場面での言語使用の経験をさせながらそれらの習熟を図る」、「視聴覚教材や、LL、コンピュータ、情報通信ネットワークなどを生かした指導を行う」、「学習の成果を活用して、教室の内外において積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」などである。

結論

さきにも述べたように、この調査だけからでは、指導法、学生の自己評価、実際の英語運用能力、これらの関係がどのようなのかは詳しくはわからない。しかしながら、このような調査を進めることにより、一国の中だけで見ていてはわからないことがわかると思うのである。単に得点を競い合うのではなく、よりよき指導を行えるよう互いに協調しながらさらに調査を進めるべきであろうと考える。